

『元気のゆずりあい 地下室にいた供血犬シロ』を読んで

シロや他の供血犬をたすけるために、自分からすすんで
汚い地下室をそうじしたり、院長を説得したりするケリーさんの行動は、
助けたいという思いが強かったからこそできた行動だと思いました。

(あいみ)

『元気のゆずりあい 地下室にいた供血犬シロ』を読んで

この本を読む前は「供血犬」と「供血猫」の存在を知りませんでした。

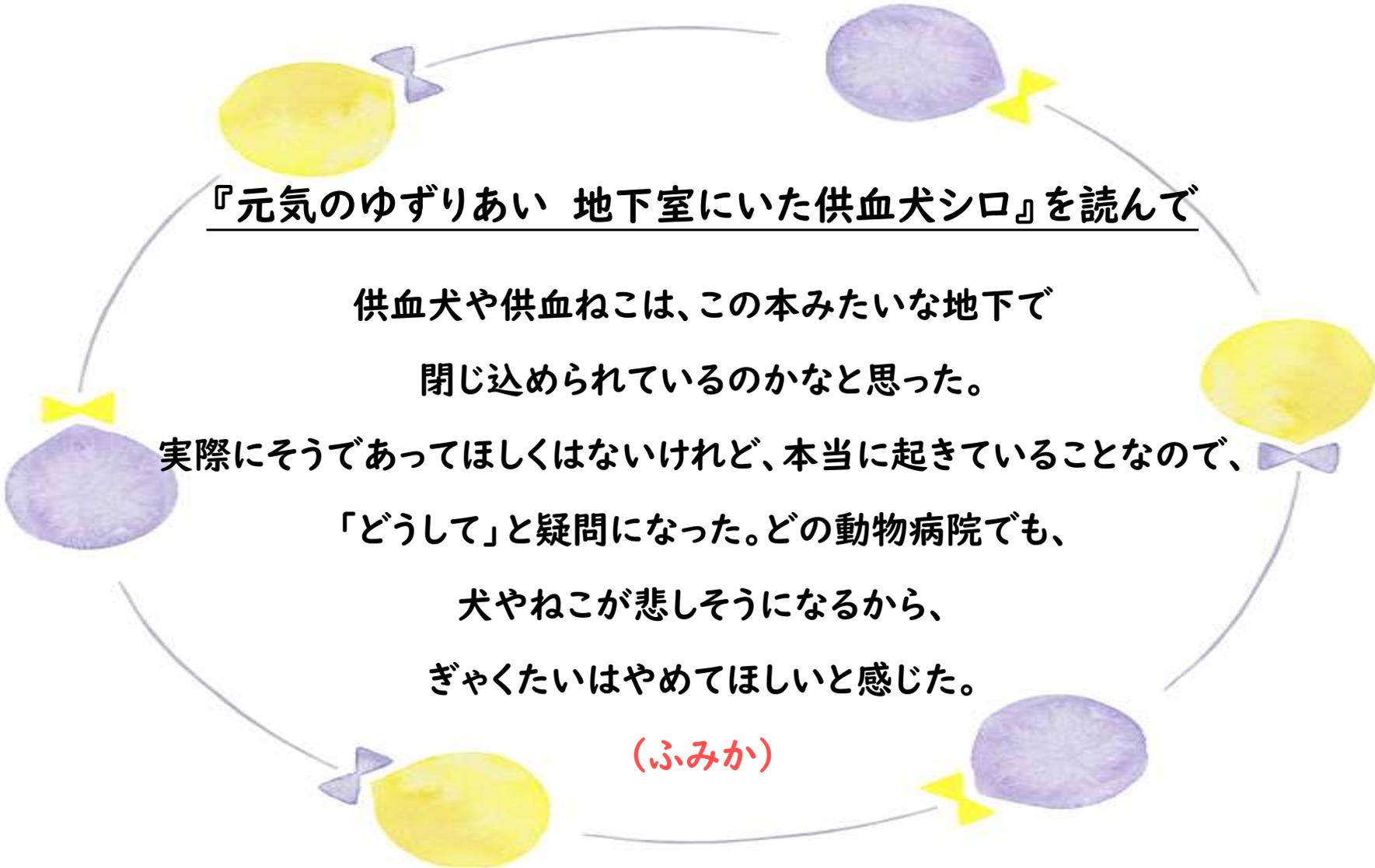
最初は採血するのはかわいそうだなと思いましたが、
採血される犬や猫がいないと病気やけがが治らない、または
死んでしまう犬や猫がいるから必要だと分かりました。

そんな供血犬（供血猫）は、たくさんの命を救ってきました。

わたしはまだ献血することはできませんが、命を救うことはできるかもしれません。

わたしも「ケリーさん」のように、一つでも命を救うことができればいいなと思います。

(ゆずは)

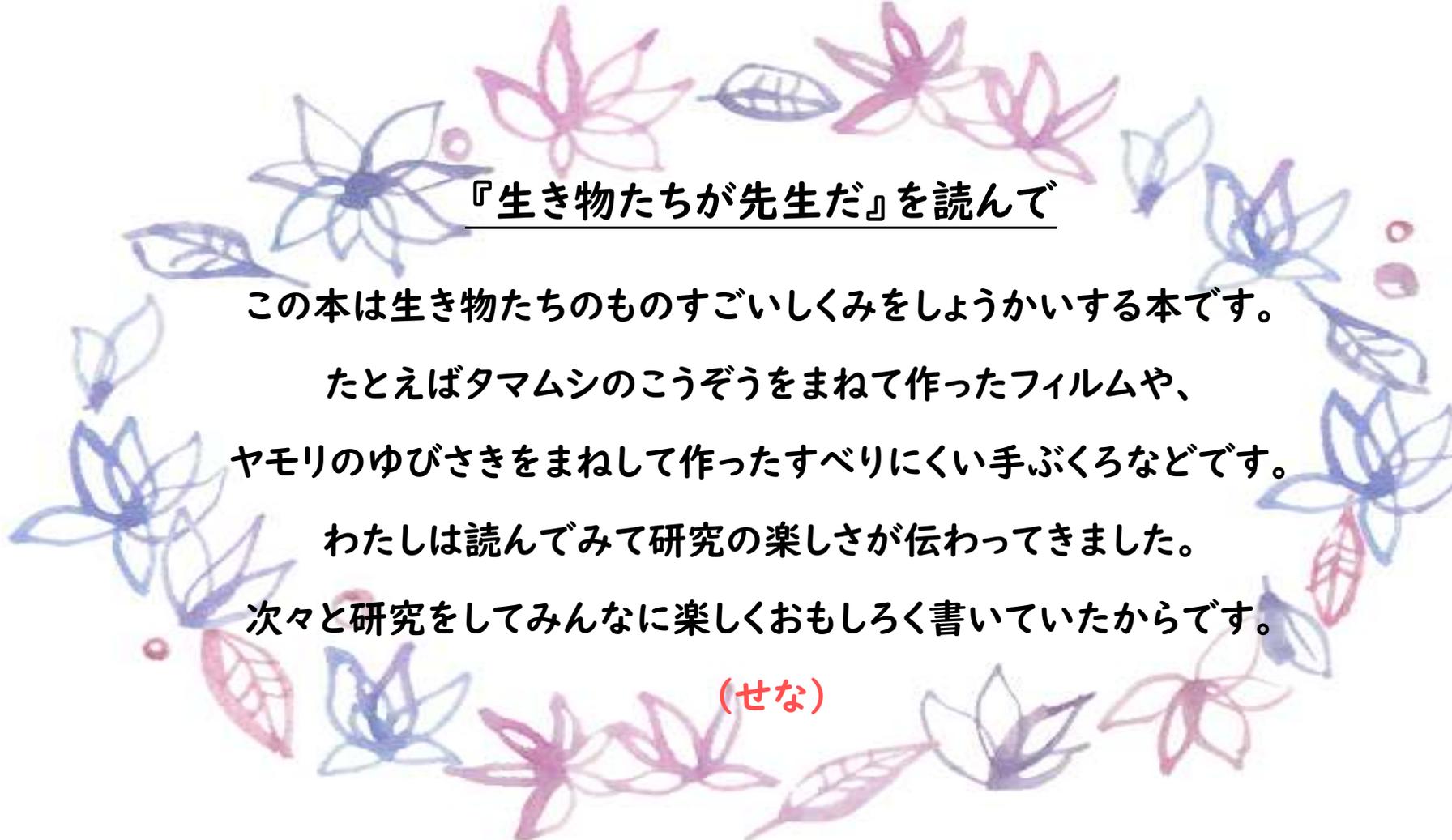


『元気のゆずりあい 地下室にいた供血犬シロ』を読んで

供血犬や供血ねこは、この本みたいな地下で
閉じ込められているのかなと思った。

実際にそうであってほしくはないけれど、本当に起きていることなので、
「どうして」と疑問になった。どの動物病院でも、
犬やねこが悲しそうになるから、
ぎゃくたいはやめてほしいと感じた。

(ふみか)



『生き物たちが先生だ』を読んで

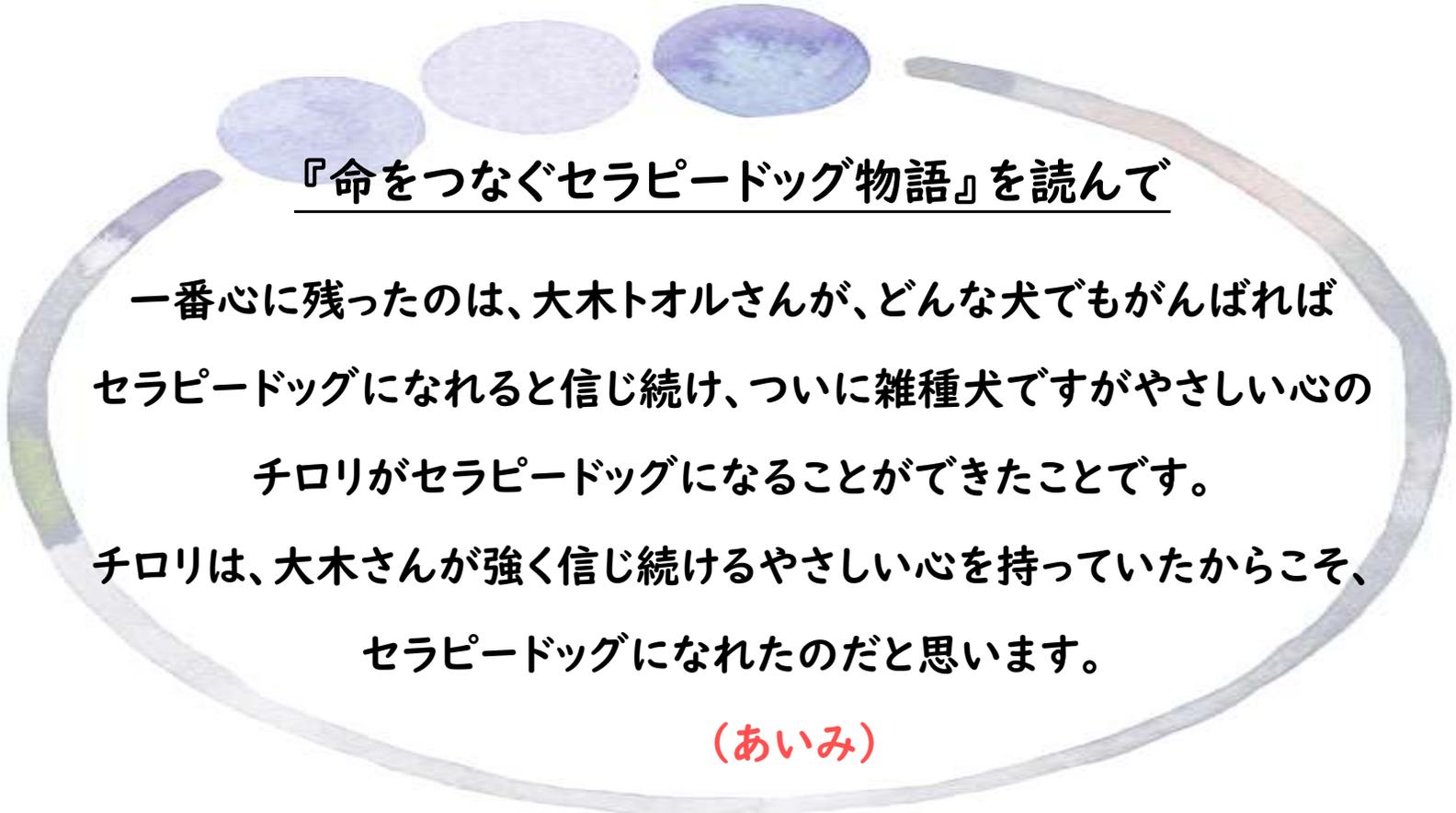
この本は生き物たちのものすごいくみをしょうかいする本です。

たとえばタマムシのこうぞうをまねて作ったフィルムや、
ヤモリのゆびさきをまねして作ったすべりにくい手ぶくろなどです。

わたしは読んでみて研究の楽しさが伝わってきました。

次々と研究をしてみんなに楽しくおもしろく書いていたからです。

(せな)

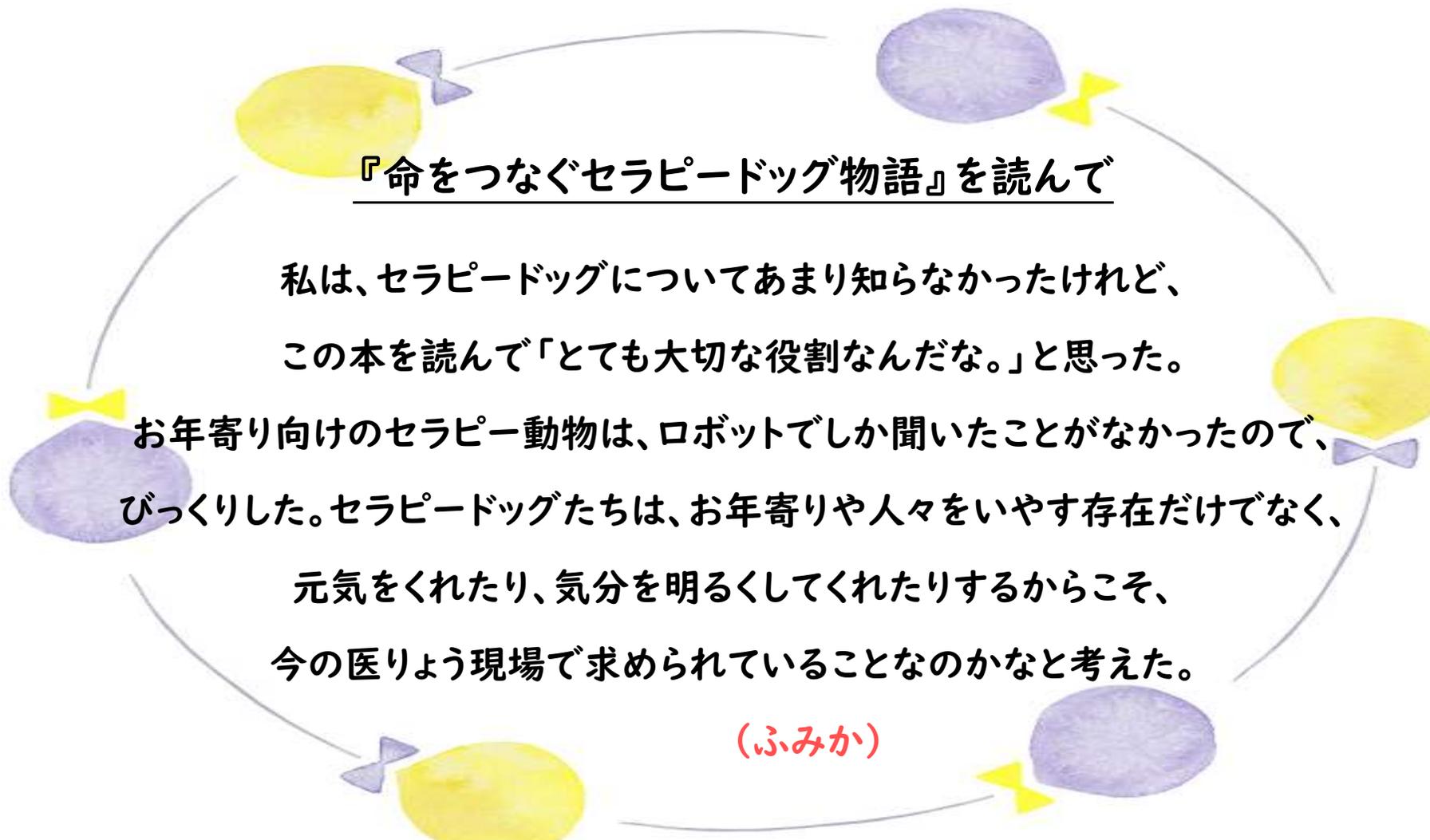


『命をつなぐセラピードッグ物語』を読んで

一番心に残ったのは、大木トオルさんが、どんな犬でもがんばればセラピードッグになれると信じ続け、ついに雑種犬ですがやさしい心のチロリがセラピードッグになることができたことです。

チロリは、大木さんが強く信じ続けるやさしい心を持っていたからこそ、セラピードッグになれたのだと思います。

(あいみ)



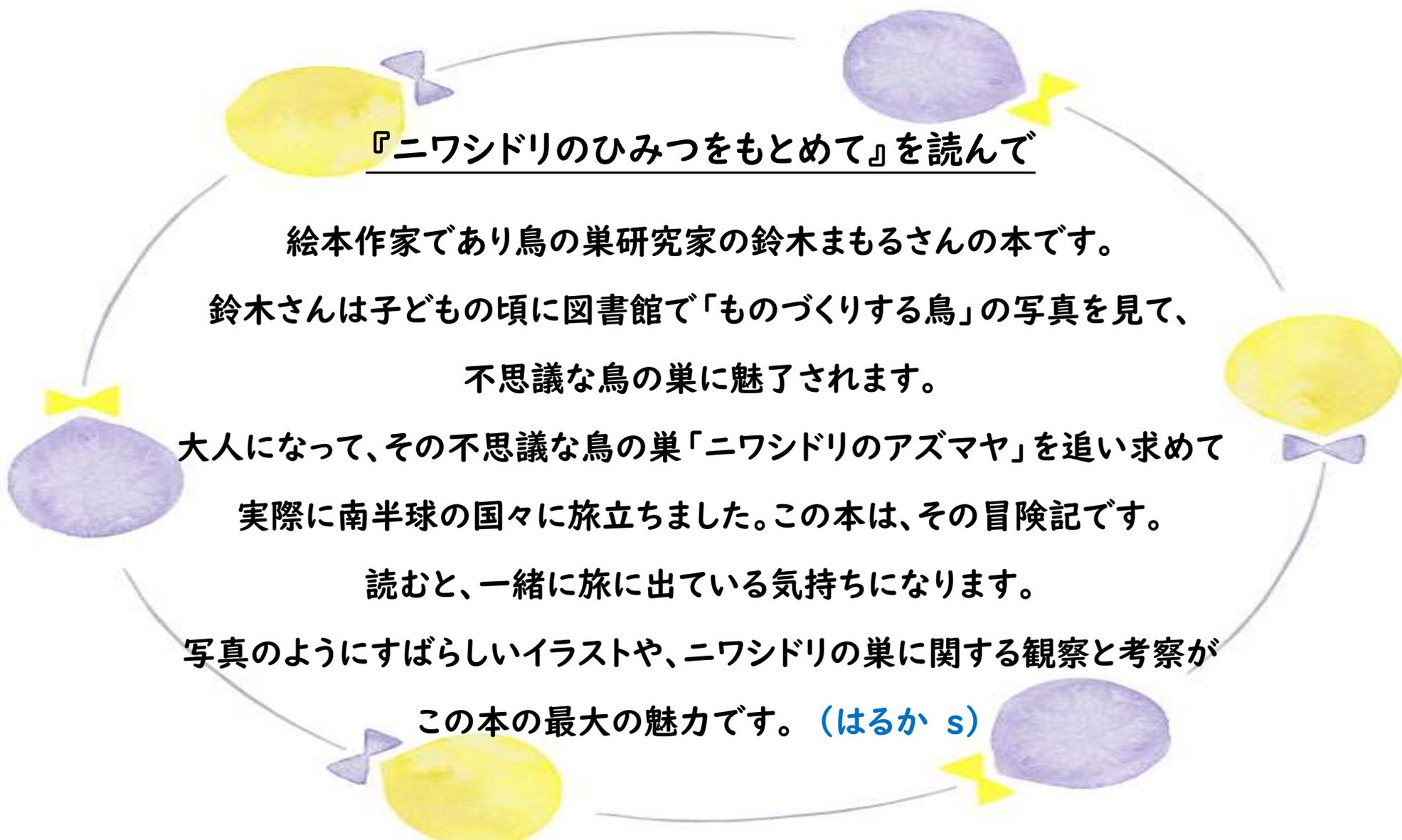
『命をつなぐセラピードッグ物語』を読んで

私は、セラピードッグについてあまり知らなかったけれど、
この本を読んで「とても大切な役割なんだな。」と思った。

お年寄り向けのセラピー動物は、ロボットでしか聞いたことがなかったので、
びっくりした。セラピードッグたちは、お年寄りや人々をいやす存在だけでなく、

元気をくれたり、気分を明るくしてくれたりするからこそ、
今の医りよう現場で求められていることなのかなと考えた。

(ふみか)



『ニワシドリのひみつをもとめて』を読んで

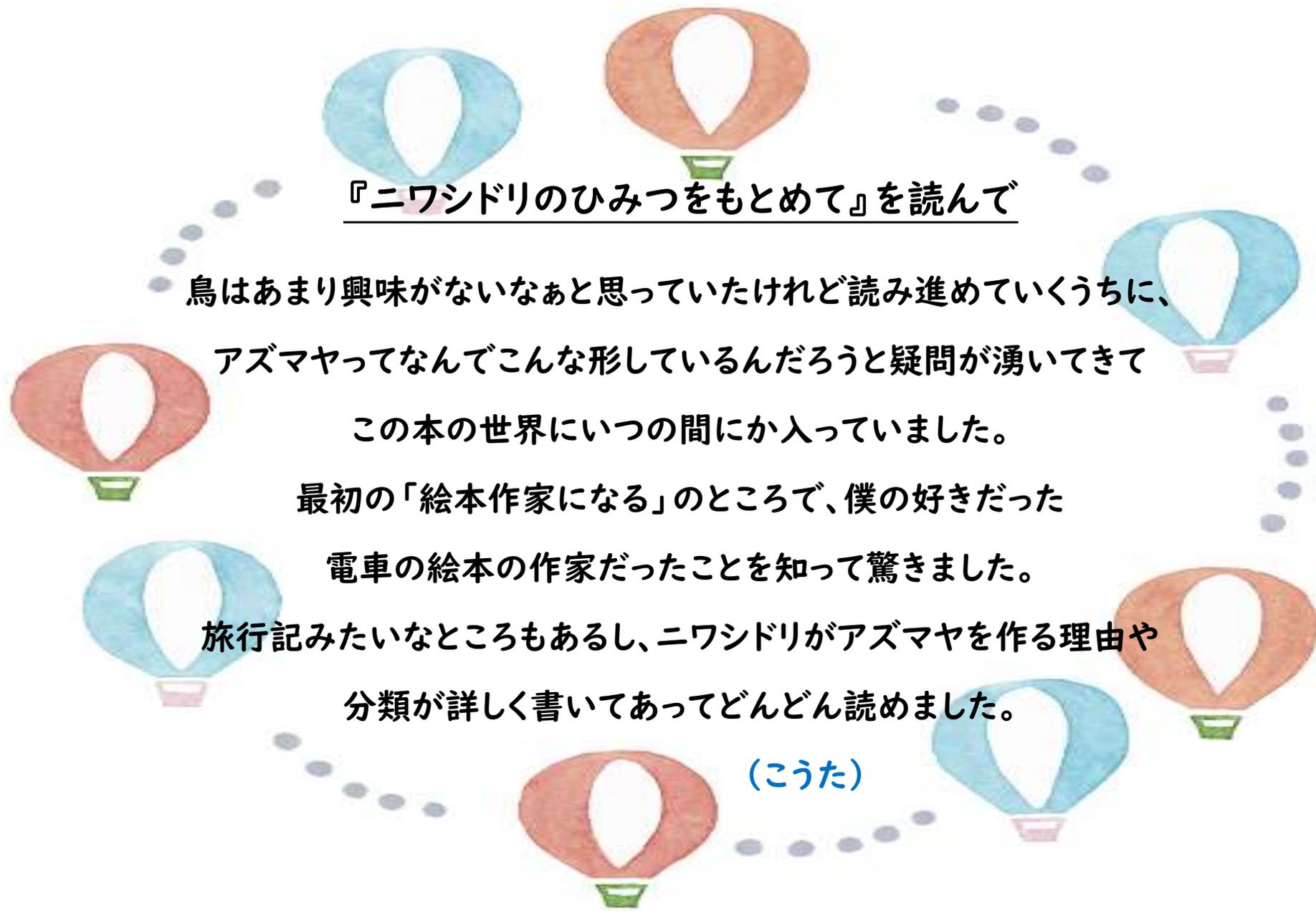
絵本作家であり鳥の巣研究家の鈴木まもるさんの本です。

鈴木さんは子どもの頃に図書館で「ものづくりする鳥」の写真を見て、
不思議な鳥の巣に魅了されます。

大人になって、その不思議な鳥の巣「ニワシドリのアズマヤ」を追い求めて
実際に南半球の国々に旅立ちました。この本は、その冒険記です。

読むと、一緒に旅に出ている気持ちになります。

写真のようにすばらしいイラストや、ニワシドリの巣に関する観察と考察が
この本の最大の魅力です。 (はるか s)



『ニワシドリのひみつをもとめて』を読んで

鳥はあまり興味がないなあと思っていたけれど読み進めていくうちに、

アズマヤってなんでこんな形しているんだろうと疑問が湧いてきて

この本の世界にいつの間にか入っていました。

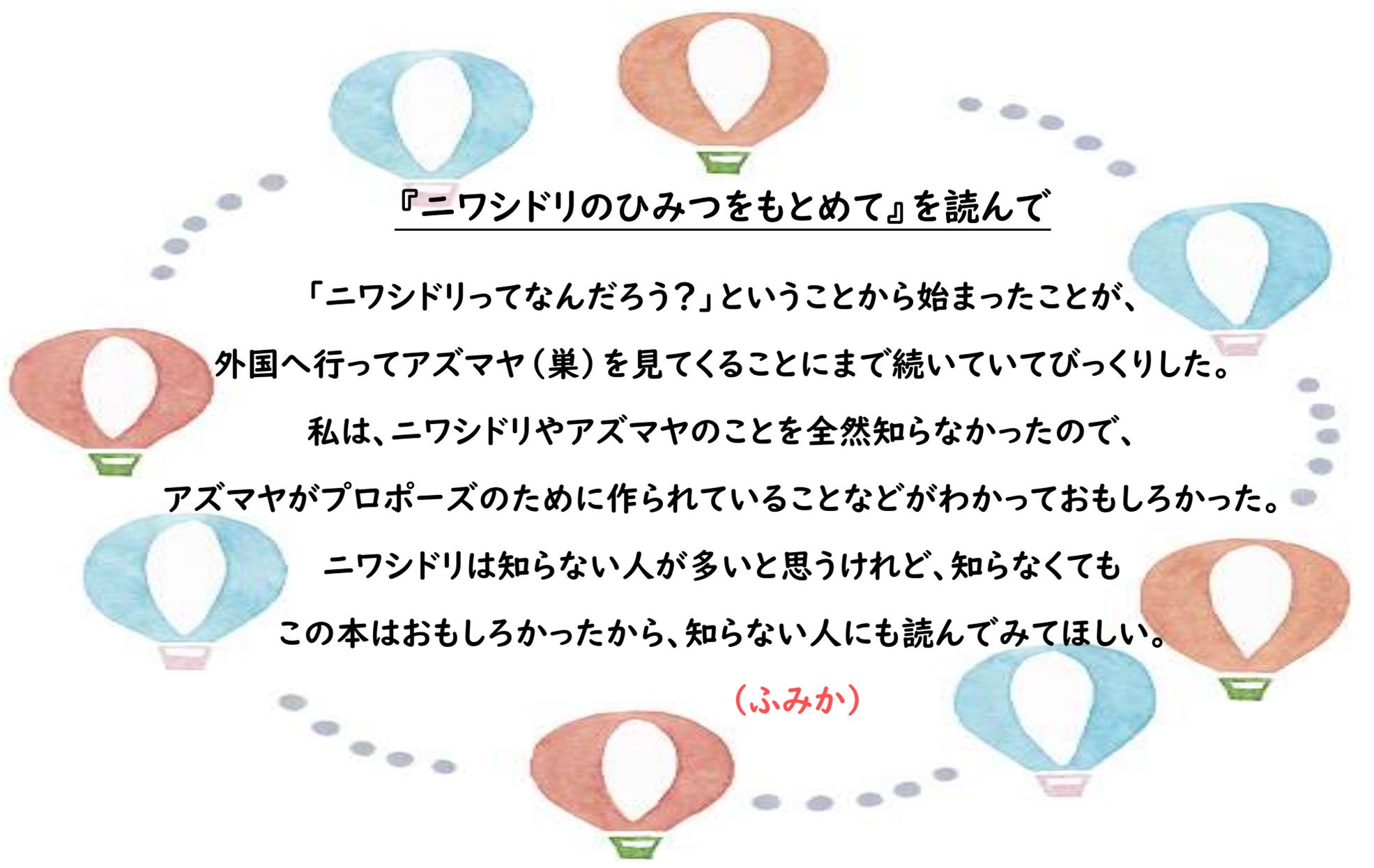
最初の「絵本作家になる」のところで、僕の好きだった

電車の絵本の作家だったことを知って驚きました。

旅行記みたいなのところもあるし、ニワシドリがアズマヤを作る理由や

分類が詳しく書いてあってどんどん読めました。

(こうた)



『ニワシドリのひみつをもとめて』を読んで

「ニワシドリってなんだろう?」ということから始まったことが、
外国へ行ってアズマヤ(巣)を見てくることにまで続いていてびっくりした。

私は、ニワシドリやアズマヤのことを全然知らなかったので、
アズマヤがプロポーズのために作られていることなどがわかっておもしろかった。

ニワシドリは知らない人が多いと思うけれど、知らなくても
この本はおもしろかったから、知らない人にも読んでみてほしい。

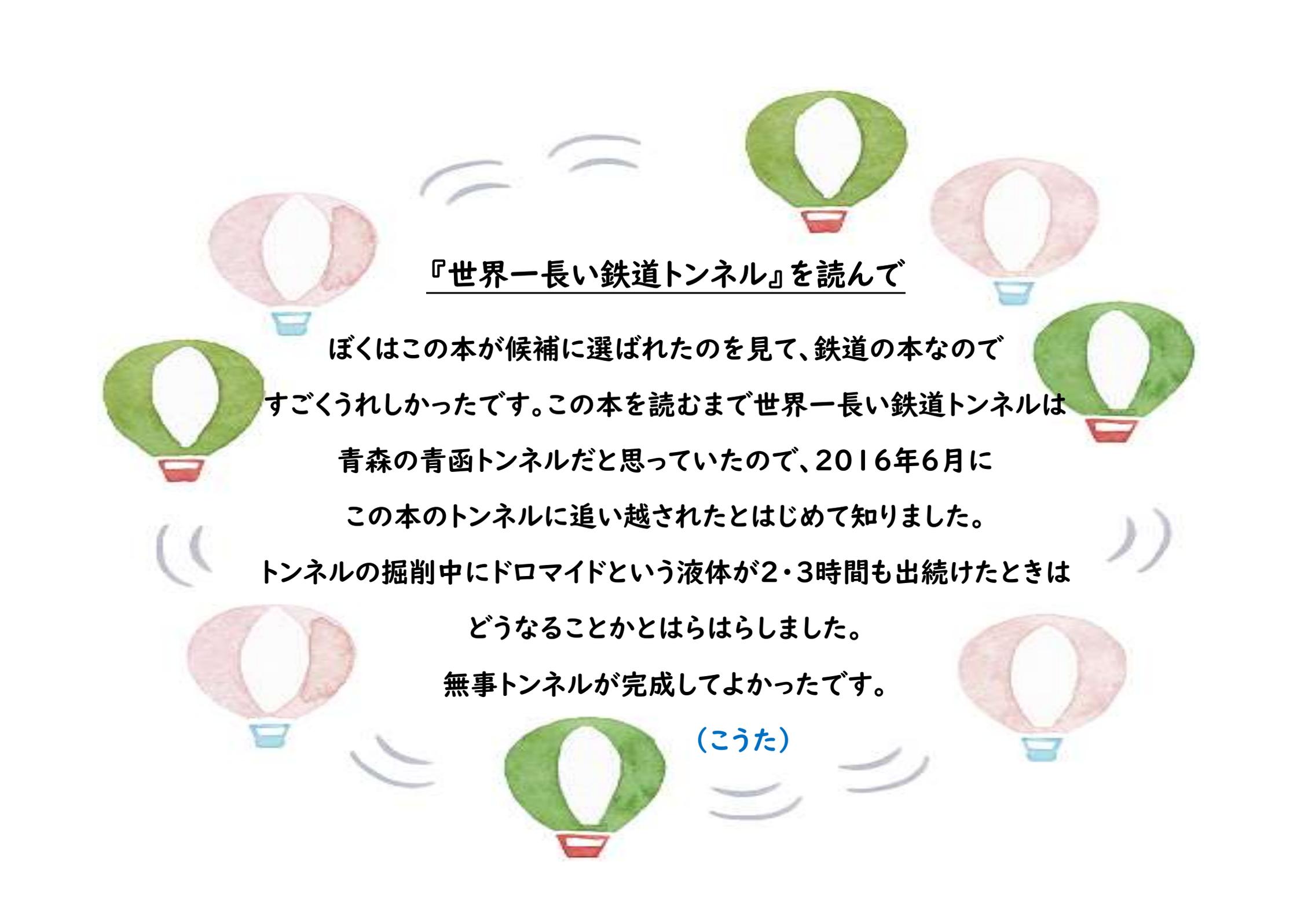
(ふみか)



『アフリカで、バッグの会社はじめました』を読んで

仲本千津さんは、性格がパワフルな人で、アイデアが次々と出てくるのがすごいと思った。ウガンダという国の首都カンパラという場所は初めて聞いて、「ここってアフリカだよね？」とバッグを作っているとは思ってなかった。アフリカの模様（アフリカプリント）は、日本人にとってもかわいくておしゃれなので、日本での発売をもっとしてほしいと興味をもった。

(ふみか)



『世界一長い鉄道トンネル』を読んで

ぼくはこの本が候補に選ばれたのを見て、鉄道の本なので
すごくうれしかったです。この本を読むまで世界一長い鉄道トンネルは
青森の青函トンネルだと思っていたので、2016年6月に
この本のトンネルに追い越されたとはじめて知りました。

トンネルの掘削中にドロマイドという液体が2・3時間も出続けたときは
どうなることかとはらはらしました。

無事トンネルが完成してよかったです。

(こうた)